

No.013

練馬稲門会 練稲 Press

石井新会長を選出、第44回総会

練馬稲門会は7月9日(土)、ココネリホールにて3年ぶりとなる対面での総会を開催し、退任される荻野隆義会長の後任に石井弘美氏(昭57理工)を選出しました。

前日の8日には安倍元首相が参院選の応援演説中の奈良で凶弾に斃れるという衝撃的な事件がありました。コロナ禍が続く中でも当日は101名の会員が集まり久闊を叙しました。時節柄酒宴こそ自粛したものの早稲田大学応援部のリーダーの熱演で会場は大いに盛り上がり、石井新会長の船出を祝いました。

就任のご挨拶

練馬稲門会会長 石井弘美

私は去る7月9日の練馬稲門会第44回総会において第3代目の会長に選任され就任致しました。大任を仰せつかり身の引き締まる思いがしております。会員の皆様には平素から練馬稲門会のために多大なるご支援とご協力を賜りまして誠に有難うございます。また、これまで26年の長きにわたり練馬稲門会を率いてこられた荻野隆義前会長にはそのご功績に衷心より感謝申し上げますとともに、深甚なる敬意を表したいと存じます。

就任にあたり私と練馬稲門会とのこれまでの関わりについて少し触れさせていただきます。私は昭和57(1982)年に理工学部建築学科を卒業しました。12年ほど宮仕えをした後、父の経営する建設会社に戻り、東京青年会議所(JC)に入ったことがきっかけで練馬稲門会に入会しました。今から27年前のことです。当時の塩田事務総長や、先般亡くなられた手塚さんなど先輩方に随分遅くまで引き回され可愛がって頂きました。「1に懇親2に懇親、3・4がなくて5に懇親」がモットーでした。後輩は先輩を敬い、先輩は後輩を可愛がること。先輩が後輩を顎で使い、後輩が先輩に遠慮する関係はダメだと教えられました。今に通じる練稲精神だと思います。

1998年、設立20周年の記念総会が池袋のサンシャインプリンスホテルで開催され、小沢昭一さんをゲストに200名が集いました。この時若手の幹事として汗を流しました。その後幹事長に推挙され、松本誠さんにバトンタッチするまで11年間努めました。2003年の25周年は光が丘第一ホテル(現カデンツァ)で開催し、同期生の柳亭燕路師匠が司会で若手落語家を集めて大喜利をやったことも懐かしい思い出です。

他方、幹事長時代に大学校友会の幹事となり、露木和子事業委員長(露木茂氏夫人)の下で「稲門祭」の本格的な立ち上げに関わりました。2007年の大学創立125周年の稲門祭では練馬の荻野会長が実行委員長、私が景品広告本部長を務め、車4台を景品として集めたこともありました。

練馬稲門会のこれまでの歴史の中で特筆すべきはやはりニューイヤークンサートだと思います。荻野会長の発案で始まったこの催しは、今では新春の恒例行事として定着し、すでに15回を数えています。当初はかなりの批判や反対論なども多かった中で、会長を筆頭に柳洋子さん、富塚さん、小松さん、菅野さんなどのご尽力を得て幾多の難局を乗り越え、今日の隆盛に至ったことは感無量のものがあります。

練馬稲門会は、海外を含めて399ある地域稲門会の中でもその活動の活発さと多様性においてトップクラスの稲門会であると自負しておりますが、来年は45周年の節目の年を迎えます。当会の三つの使命「会員相互の親睦」、「地域社会への貢献」、「早稲田大学への貢献」を念頭に、これまでの歴史を踏まえながら、これから先の新たな「練馬モデル」とでもいうべき道をさぐっていきたいと思います。45周年記念行事もそれに相応しい催しを企画していくことと致します。

幸い私は2月の早稲田大学評議員選挙において荻野隆義様の後任の評議員として皆様からご推薦を頂き、無事当選を果たすことができました。改めて御礼申し上げますとともに、大学との強力な絆を保ちながら練馬稲門会のために渾身の努力を傾けてまいる所存ですので、今後ともご支援とご協力の程を切にお願い申し上げます。皆様方の益々のご健勝とご多幸を祈念して就任のご挨拶とさせていただきます。



「荻野時代」を振り返る

練馬稲門会前会長 荻野 隆義

これまで26年間にわたって練馬稲門会を率いてこられた荻野隆義前会長に、就任から退任までの様々な思い出を語って頂きました。聞き手は広報チームの照山忠利リーダーです。

—7月の総会で長期に及ぶ会長職を退任されました。今のお気持ちは。

●長年の懸案事項であった世代交代ができて

荻野 やっと肩の荷を下ろした感じでほっとしています。大分前から「世代交代」を訴えて後継者ができるのを待ち望んでいたのですが、なかなか機が熟さず今日に至りました。26年前に父の後を継いで会長に選ばれた時には、正直言ってこんなに長く務めることになるとは思いませんでした。でも振り返ってみるとあっという間だったような気がします。

—就任された当時はどんな状況だったのですか。

●会のさらなる発展のためにサークルを

荻野 父の優が昭和53(1978)年の創立から16年間会長を務めました。私が第2代会長に就任した当時は、東京23区稲門連合会の結成大会が開かれ、16の都内稲門会が一堂に会しました。残りの7区の稲門会もその年に結成されました。従来からの各道府県校友会支部と同一歩調をとることになったのです。当時の練馬稲門会の会員数は152名と設立当初

の200名から減っていました。そこで会のさらなる発展のためにいくつかのサークルを作り、会員相互の親睦と連帯感を図ることにしました。



—それが今ではサークル数も20に増え、23区の中ではトップクラスの稲門会となりました。

●サークルの増強に尽力された方々に感謝！

荻野 サークルの育成や会員の増強対策に取り組んでくれた方々の功績が大きいと思います。中でも塩田さんには幹事長、事務総長として献身的な働きをして頂きました。校友宅への戸別訪問で入会を勧誘したり、ゴルフ、旅行、スポーツ観戦、テニス、釣り、囲碁、ダンスなどサークルを次々と立ち上げました。旅行部会は2000～2008年までの間にハワイ、オーストラリア、タイ、ベトナム、濟州島などのツアーを実施しましたし、ゴルフ部は中島さんの尽力で100名を超える最大サークルとな



石井建設株式会社

代表取締役 石井 弘美 (昭和57年理工)

〒165-0031 東京都中野区上鷲宮4-10-3 TEL:03-3999-1361 FAX:03-3999-1328

り、昨年200回のコンペをクリアしました。その後事務総長を務めた関さんにも頑張って頂き、今日の隆盛の基礎を作ってくれましたが、昨年急逝されたことは本当に残念です。

—在任中の思い出で印象深いことは。

●難局を乗り越えニューイヤーコンサートを

荻野 いろいろありますが一つだけ挙げるとすればやはりニューイヤーコンサートでしょうか。練馬稲門会の活動理念として「会員相互の親睦」、「大学への貢献」に加えて「地域社会への貢献」を掲げています。この三つ目の目的を達成するにはどうしたらよいかと考えたときに浮かんだのが早稲田大学交響楽団によるニューイヤーコンサートでした。2007年に第1回の演奏会を練馬文化センターで開催しました。これを提案した当初は様々な異論、反論があり、柳洋子さんの回想録によれば「どうせ成功などするわけない」と嘯く有力者もいたそうです。新年早々の寒風の中早朝から会場予約に並んだのを手始めに、チケット販売、団体・企業への協力要請など山のような仕事待ち受けていましたが、柳洋子さん、富塚さん、小松さん、菅野さん、華岡さんなどのご尽力で難局を乗り越え、実現にこぎつけることができました。

今では練馬区の新春恒例の行事として定着し親しまれています。また収益の中から「練馬みどりの葉っぱい基金」にも毎回寄付を続けており、地域社会への貢献という目的を十分果たしています。

残念なことは任期の終わりの2年半ほどがコロナの感染拡大で活動にブレーキをかけられたこ

とです。これは練馬稲門会だけでなくこの団体も同じですが、コロナ感染初期に高名な大病院の先生が「人々がコロナから完全にフリーとなるには5年かかる」と言われたことが思い出されます。このため昨年10月に私のホームコースである武蔵CCを借り切ってゴルフ部200回記念大会を企画したのですが断念せざるを得なかったことが本当に心残りです。

—最後に、これからの練馬稲門会に対するアドバイスをお願いします。

●終生の早稲田キャンパスとして発展を

荻野 私自身任中は会社経営と業界団体等の役職に加え、早稲田大学関連の仕事もあり大変多忙でした。そのため練馬稲門会の運営については手が回らないことがあったのも事実で、内心忸怩たる思いがしています。それでも多くの方々に支えて頂き何とか職務を全うすることができました。関係者の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

後任の石井新会長も現役の経営者ですので、私同様多忙な中での会長職となりますが、幸いスタッフ陣も充実しているようですので、新しい感覚でさらに会の活性化と発展をめざして頂きたいと思います。

「早稲田大学」という現実のキャンパス生活は大体が4年間程度ですが、「練馬稲門会」というキャンパスは世代を超えて交流できる終生のキャンパスです。早稲田ファミリーであることにさらに誇りと喜びを感じられるような団体、そんな存在になってもらいたいと念願しています。



国産自動車交通株式会社

取締役社長 荻野隆義 (昭40年政経)

東京都練馬区豊玉南3-24-18 TEL.03-3994-3333(代)

スキーに始まり、スキーに明け暮れた4年間!

MY LIFE MY SKI IN WASEDA!
三宅 成嘉

1965年(S40) TOKYOオリンピック(1964年)開催の翌年、早稲田中学に入学、それ以来ほぼ10年間早稲田の地で学生生活を過ごしました。(といっても1年間はスキー狂いが生じて、お茶の水の某予備校に通いました。)いわゆる一浪して1972年(S47)札幌オリンピック開催の年、何とか商学部に入學しました。

早稲田中学に入りたと思ったのは、当時としては珍しく中学からスキー学校があり、単純にスキーがしてみたいとの思いで、それほど「早稲田」に執着したわけではありませんが、やっぱり「早稲田」でした。(自由な校風)。

中学、高校の6年間もスキー好きの体育の先生について回り、基礎からみっちり教わり、いつしかスキーの指導員の資格取得を目指すようになり、大学1年の冬SAJ1級を取り、在学中に準指導員取得とばかり、ほぼ毎冬のシーズン60日×90日雪の上にいました。在学中は学内のスキーサークル創設メンバーだった「ツエルマットスキークラブ」に在籍し、1974年(S49)から始まったオール早稲田スキー同好会の競技会に参加し、2年時総合4位、3年時総合優勝、4年時総合2位と結構活躍し、その筋からは「有名人?」でした。残念ながら、在学中には指導員の資格を取得することはできませんでした。

2022年2月、志賀高原にて



1974年2月、志賀高原フリー滑走



ところで、「ゼミ」を受講せねばならず「計量経済学」とやらを取り、ゼミ仲間のお陰で単位のとり、卒業の年の3月まで滑っていました。何とか卒業できました。折しも、オイルショックの最中の就職活動でしたが、運よく?

味の素AGF(旧味の素ゼネラルフーズ)に入社出来ました。1976年(S51)で

社会人になつてから、3〜4年は大人しく真面目に仕事(営業職)をしていましたが、学生時代にやり残した「準指導員」の資格取得の道が忘れられず、在学中から在籍していた東京都スキー連盟加盟のクラブ合宿に参加し、1979年(S54)資格取得。1980年(S55)全日本スキー連盟全国基礎スキー選手権の東京都予選にも出場しました。(結果は?)

それ以降は、会社をさぼって、スキーばかりしていたので、ほぼ23年間は西から東へと全国主要都市への転勤生活でした。

余談ですが、1983年(S58)結婚し、新婚旅行はカナダ・バンフでこれまたスキーでした。

50歳を過ぎてから、東京に戻り、63歳迄仕事を続け、その間は趣味程度にスキーをしておりました。

60歳の年、練馬橋門会のゴルフ部会に入会し、また早稲田のご縁復活とばかり、現在諸先輩のご指導を受けております。

63歳でサラリーマン生活を卒業しましたが、大学時代の同期の仲間たち(現志賀高原の某ホテルの支配人)の紹介等で、冬場は志賀高原、菅平高原で趣味と実益を兼ね、子供達のスキー教室、シニアのスキー

スクールの手伝いをしながら、40日間程度、スキー場で暮らしております。春になれば、冬が来るまで、練馬の皆さんとグリーン上でゴルフボールを追っております。

「WASUDA」に学んで、波風うけて生涯スポーツとしてスキー&ゴルフに出会えた事に感謝です。また、好きなことを未だにさせてくれる家族にも感謝です。

今年70歳ですが、まだまだ元気に過ごしたいと思っており、近い将来、3人の孫達にもスキーの楽しさを味わって欲しいものです。

最後に、MY LIFE MY SKI IN WASEDA!

(昭和51年商学)

厳しく激しい極真空手の練習に耐え抜く

加藤 正彦



1977年(昭和52年)4月、政治経済学部経済学科に入学した私は、空手道極真会早大支部に入部した。

格闘技ブームは、90年代後半から「PRIDE」と言った総合格闘技を中心にピークを迎えるが、私が早稲田に入学したころは極真空手が大きなブームとなっていた。

これは「少年マガジン」に連載されていた、極真空手の創始者である大山倍達館長を主人公とした漫画「空手バカ一代」や映画「地上最強のカラテ」の影響が大であった。

高校時代から空手に興味のあった私は、入学後ほどなくして当時4号館に部室があった極真会の門を叩いた。

同好会(サークル)であったが、練習は大変厳しかった。極真空手はフルコンタクトと言われる直接身体に当たると蹴りの応酬で、常に怪我の危険を伴

う激しい空手である。そのうえ、早大極真会の創設者は、その後極真会館の全日本チャンピオンとなり、大道塾を設立する東孝氏であり、私が入学当時の主将は、その後全日本選手権を三連覇することとなる三瓶啓二氏であった。他にも選手権に出場するレベルの学生がおり、皆本格的に取り組んでいた。

練習は記念会堂のステージや、演劇博物館前の路上及び4号館の廊下で行っていた。部員は多い時は3〜40名いたので、その頃在学されていた方は、大勢で大声を出して突いたり、蹴ったりしている姿を目撃されているかも知れない。

日ごろのキャンパスでの練習に加え、池袋にある総本部道場にも時々出向いた。当時はまだ大山倍達館長が直接指導を行っていた時代で、マンガの主人公で何やら伝説上の人物に最初は緊張したが、マンガのように十円玉を指で曲げたり、牛と戦ったりする練習ではなく(当たり前ですが)、ごくオーソドックスな指導であったと記憶している。その他本庄や自分のセミナーハウスや山中湖などで行った春夏の合宿も思い出深い。

大会に出場したこともあったが、これと言う成績は上げられなかった。また一級に昇進後、昇段審査に二度チャレンジしたが、いずれも「審査中」とのこと。宙ぶらりんのまま卒業を迎えることとなった。

大した成果を挙げることはできず、空手について偉そうに語ることはできないうが、仲間たちと共に厳しく激しい練習を耐え抜くことよって得た心身の強さは、その後の人生の糧になったと思っている。

(昭和56年政経)

早稲田大学応援部

池田 絵里香



「もしかして、応援部って運動部なのかな……」

午後6時、練習前のウォーミングアップとして旧記念会堂の観客席を10分間ダンスしながら、ふと気づいた瞬間だった。この時すでに練習参加から2週間は経過していたのだから、私も随分ぼうっとしていたものだ。

スポーツ観戦が好きで、高校時代からチアに憧れていた。新歓の時期、応援部の机の周りで声をかけられるのを待つてウロウロしていた。

そして、練習参加。地方から出てきて誰も知り合いがなく孤独だった生活が一変。応援部に入ってから、毎日が目まぐるしかった。

体育局新人パレードという各部1年生がユニフォームを着て高田馬場から早稲田までパレードする行事が、4月早々にあった。そして、毎日昼休みに先輩が応援曲を教えてくださいましたおかげで、4月末に神宮球場での野球応援デビュー。

私は松坂(大輔)世代で野球部同期の

和田毅選手の活躍もあり、入学した年にリーグ戦優勝した。よくわからないまま提灯行列。煌びやかな新宿の高島屋前の道路を歩いてパレードしていることが信じられなく、大はしゃぎだった。

夏休みには2週間の合宿。合宿最終日には秋の早慶戦を模した応援練習をする。9回の応援では「エンドレス紺碧」と言っている年の新入部員の数だけ『紺碧の空』を踊り続ける。体は限界だが、なぜか踊り続けることができ、最後には、『早稲田の栄光』(早慶戦で勝った時のみ歌う曲)と校歌を歌う。

この原稿を書くにあたって久しぶりに思い出した合宿生活。今も鮮明に覚えていることに驚きだ。

もちろん、野球応援の他にも様々な応援に行った。レガッタ、アメフト、サッカー、ボクシング、バスケットなど。

ある部のOBの一言は、今でも覚えている。

「今日は応援に来てくれてありがとう。でも早稲田が劣勢だった時、応援も元気がなくなつたから、そういう時こそ元気づけてほしいな」

この言葉を心に刻んで、その後の応援部生活を送った。

12月、4年生の引退と同時に1年生は正式な部員として認められ、応援部パッジを渡される。今でも大切に保管している。

応援部は素晴らしい思い出と、今の私を作ってくれた。夫(古今亭志ん雀)も夫の両親も稲門。今日は久しぶりにみんなで校歌を歌おうか。(平成15年政経)

早稲田スピリットが政治家の道へ

尾島 紘平



私がワセダを志したのは高校時代、当時は「ハンカチ王子」フリーパーでした。東京への憧れに加え、同じ年である斎藤佑樹投手に何故かライバル心を抱いており、一年の浪人生活を経て、政治経済学部経済学科に進学しました。

経済学科を志望しておきながら数学が苦手だったため、必修科目であるミクロ経済学・マクロ経済学では非常に苦労し、今でも単位を落とす夢を見るほどです。最近では受験科目として数学が必須になったとのこと、時代の流れを感じます。

私は良くも悪くも典型的な「学生」だったと思います。授業はそこそこに高田馬場に繰り出し、朝までお酒を飲み、二日酔いで授業を受け、また高田馬場に繰り出す毎日でした。下宿は落合のアパートでしたが、ほとんど寝ることにしか使っていなかったと思います。

当時はバンド活動をしていました。軽音楽サークルに所属をし、学生会館にも入り浸っていました。結局はお酒がメインだったと記憶しています。アルバイトも同級生に誘ってもらった曙橋のコーンセンターでしたが、そこで出会った妻と結婚し、今に至ります。

政治の世界にご縁を頂いたのも、当時SNSで知り合った5年生の先輩がきっかけでした。その紹介で東京に出てきて

初めて出会った政治家が小池百合子さんそのままインターン生になり、秘書になり、区議会議員になり、現在、都議会議員の仕事させていただいています。

大学時代には政治家になることなど夢にも思っていなかった一方で、校歌にもある「進取の精神、学の独立」という独特の校風に影響されたところはあり、いつの間にか世の中に貢献したいという思いが芽生えていました。根底にあった早稲田スピリットが、結果的に私を後押ししてくれたのではないかと考えています。

ちなみに、実は政治家になつてからも、そんな青春時代が忘れられないのか、無意識に原点回帰を求めているのか、今でも気づけば高田馬場に戻ってきてしまいます。特に、栄通りの奥にある「鳥安」には、同じく稲門の政治家仲間としようちゅう集まっています。

早稲田大学を卒業してありがたいことは、とにかくOB・OGの多いことです。通じ合うきっかけをもつことは政治の世界では重要なことであり、その意味で母校には今でも、公私ともに頼らせていただいています。

練馬稲門会の活動にはなかなか参加できておらず恐縮ですが、25歳で入会した当時にはダントツの最若手だった私も33歳、そろそろ後輩が出来る頃でしょうか。コロナ禍が明ければさまざまな活動も再開されるとのこと、楽しみにしております。

今後ともワセダへのご恩と感謝を忘れず、東京・練馬のため邁進してまいります。諸先輩方のご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

(平成24年政経)

関 博之さんを偲んで

元事務総長、会長代行として練馬稲門会の発展に尽力された関博之さん（昭41理工）は昨年7月24日、病気のため急逝されました（享年78歳）。

在任中は会運営の「組織化」を唱え業務の効率化を進めるとともに、サークル活動の活性化に取り組んでサークル数を20に倍増させたほか、会員数も23区内のトップクラスにまで増強するなど大きな功績を残しました。

誰よりもワセダを愛し練馬稲門会に尽くした好漢の遺徳を偲び、昭和41年卒の同期の方々が発起人となって4月12日、桜台の「茶平」にて「関さんを偲ぶ会」が行われました。呼びかけに応じて35名の有志が参加し、それぞれが故人の業績を称え思い出を語りご冥福を祈りました。



稲門祭のご案内

早稲田大学校友会の最大のイベントである稲門祭は10月23日（日）、「さあ、始めよう！世界で輝く WASEDA とともに～ますます好きになる、だから稲門祭～」をテーマに対面で開催されます。ただしコロナの感染拡大の行方が見えない中、飲食を伴う出店は見合わせる事となりました。

この日のためにデザインされた、期間・数量限定の稲門祭記念品が販売されます。購入2000円につき1枚の福引券が付き、当日の抽選会で豪華景品が当たるチャンスもあります。

練馬稲門会は大学への協力、会のPR、新入会員の勧誘などの意味から出店参加することとしました。現時点でできる限りのプレゼンを行う予定ですので秋の一日、母校キャンパスに足を運んで頂きますようご案内いたします。



ローズガーデンコンサート

早稲田大学交響楽団は昨年引き続き光が丘四季の香公園で弦楽四重奏団による「ローズガーデンコンサート」を行います。10月30日（日）11:00と14:00の2回、昨年リニューアルしたローズガーデンの芝生中央特設ステージでワセオケ男女各2名の奏者が“J.S. バッハ /G 線上のアリア”、“見上げてごらん夜の星を”などクラシックとポピュラーをバランスよくミックスした8曲を演奏する予定です。

このイベントは練馬区からのたつての要請により「ローズガーデン・オータムフェスティバル」の中心的な催しとして行われるもので、ワセオケにとってはニューイヤーコンサートの先触れとなる行事となります。秋バラの匂う公園で素晴らしい音色に触れることができます。（雨天の場合は屋内の会場となります。）

早稲田大学交響楽団ニューイヤーコンサート2023

練馬稲門会の新春恒例の第16回ニューイヤーコンサートは年明けの2023年1月14日（土）、武蔵野音楽大学ベートーヴェンホールにて開催されます。（詳細は同封のチラシをご参照ください。）

これまでの15回は練馬文化センターで開催してきましたが、同センターが来年から2年間にわたり大規模改修に入ることから使用不可となったため、代替会場を探してきたところ、練馬区はじめ関係者のご尽力と同大学のご好意によりめでたく開催の運びとなったものです。音楽大学が他大学のオーケストラに自らのホールを提供するのは極めて異例のことであり、同大学に対しては心から謝意と敬意を表したいと思います。

なお、今回の客席数は練馬文化センターに比べ若干少なめでそれだけチケット枚数は減ることになりますが、音大のホールだけに音響効果のほどは大いに期待されることです。

また、このイベントは練馬稲門会45周年記念行事の一環として行われます。

<http://nerima.waseda-info.com/>

編集・発行：広報チーム

照山 忠利 鈴木 奎三郎 岡田 吉郎 橋口 奈保 富塚 昇

発行所：〒176-0014 練馬区豊玉南3-24-18 国産自動車交通本社ビル 練馬稲門会事務局 TEL.070(3526)4179 FAX.03(4243)2759